

表富士と表記されたパンフレット

富士吉田あれこれ

富士山の表と裏

山に表と裏はあるのでしょうか、市域に残る延宝8年(1680)の富士山の古い登山案内図「八葉九尊図」の中に、南からの頂上部に「するが口表」の注記が認められ、山の南面を表とする認識を確認することができます。大宮・村山口をたどる登山道の絶頂が「駿河口表」だったことが理解されます。それに対して、およそ100年後の史料となりますが、駿東郡方面からの「浅間駒嶽(須山口・御戦場口頂上)北・東口頂上の「薬師嶽(久須志ヶ岳)は「裏口」と記述されます(『浅間文書集』)。駿河でも富士郡からの登拜路のみが「表口」と意識されていたのであって、実際

に幕末期頃までには表口と呼ばれるようになりました。

それとは別に、表富士、裏富士という言い方が存在します。葛飾北斎の「富士三十六景」は、天保2年(1831)頃か翌年頃にかけて旅行されたものですが、西村永寿堂から順次監縮の36図が出され、後に聖摺の10図が追加されました。その10枚を挙げると、「本所立川」「從千住花街眺望ノ不二」「東海道品川御殿山ノ不二」「相州仲原」「甲州伊沢峯」「身延川裏不二」「駿州大野新田」「駿州片倉茶園ノ不二」「東海道金谷ノ不二」そして「諸人登山」で、この聖摺による10枚は、「裏富士」と呼ばれ

ることもあります。しかしながら、旅行当時、もしくは後代の呼称なのか定かではありません。これを初見にして、「富士百景」の中にも「裏不二」として甲州西部(甲府盆地西部)付近で葉煙草干しの図柄が認められ、とりわけ近代以降に表富士、裏富士の呼び方が見受けられるようになります。そして、今日では、静岡県から見た富士山を表富士、山梨県からのそれを裏富士とすると一般には理解されています。

ところで、東京オリンピックの年、1964年に開通した山梨県富士山有料道路(富士スリルライン)に続いて、1970年に静岡県営有料道路と

して、旧富士郡域の表口登山道と旧駿東郡の御戦場口登山道を結んで海拔1000mを東西に走る周遊道路と、途中東白塚から海拔2500mの新五合目に至る新登山道が開設され、その道路が表富士周遊道路と命名されることになりました。本来的な裏口の範囲に含まれる旧駿東郡までを包括して、静岡県=表口・表富士とする認識を新たに作り出したといえましょう。かつて裏口であった須山口に程近い十里木付近の原野は、「表富士十里木高原」として旅行ガイドブックなどに広く紹介されています。

<堀内真>

『吉田の火祭』無形民俗文化財学術調査から)

はじめに

吉田の火祭は、平成12年(2000)に国の記録作成などの措置を講ずべき無形の民俗文化財(記録・選択文化財)に選ばれました。これをうけて富士吉田市教育委員会歴史文化課(博物館)は記録による保護を図るために、平成

15年度に「吉田の火祭調査委員会」を構成して総合的な学術調査を実施しました。吉田の火祭を中心に、類似の祭りとしての山中湖村山中の諏訪明神安産祭、忍草の本祭などの調査を併せて実施したので、その概要を報告します。

山梨県東部に展開する諏訪神社の

秋祭には、吉田の火祭、都留市四日市場にまつられる生出神社の八朔祭、山中の安産祭、忍草の本祭などがあり、いずれも長野県諏訪大社の御狩山祭みまもりやままつりにつながる祭りといえます。吉田の火祭は、現在は北口本宮富士浅間神社の例祭と認識されていますが、もとは地域の氏神であった諏訪神社

と共催の祭りでした。谷村の生出神社は、もともとの諏訪神社を領主の嫡子の誕生にちなんで生出神社と名称変更したものです。ここでは、富士山北麓地域で行われるこれらの秋祭について、比較しながらみていきます。

吉田の火祭

祭りの準備と組織

火祭に燃やす大松明(結松明)は七月初ころに製作をはじめます。昔は上吉田の表通りで松明を結う光景を見かけたのですが、現在は新西原にある木材流通センター、恩賜林保護組合などでまとめて作っています。最初に結初式むすびはつしきの神事を行った後、お盆の期

間を除いて連日作業を続けます。松明作りの技術は山梨地区の人たちによってしっかりと伝承されています。

諏訪明神の神体は蛇の神だといわれ、火祭に神輿が下る時には蛇と一緒に下るといわれています。祭りの前には、上吉田では表の川と御筋の屋敷内を流れる禊の川をきれいに掃除します。そして火祭に蛇を見ると非常に縁起が悪いといわれていました。

身内に不幸のあった家のものは、「ブス服ぶすふくがかかっている」といわれ、神輿に触れてもいけない、拝観してもいけないという仕来りがあります。近親者のシブク(死服)の場合には、祭りの期間は他町村へ避難します。これを「テマ(手間)に出る」といいます。もう少し関係の薄いものはブクは、クイコミ(悔やみ込み)にすることで、松明の火や神輿を見ないよう

にして、家を戸閉にしてその中でひっそりとしています。

神社祭典世話例は通常、世話人と呼ばれます。上町(上宿)4名、中町(中宿)4名、下町(下宿・中曾根)6名の計14名で、任期は一年となっています。この14名で上吉田における一年間の祭典準備、運営、後片付け等を取り仕切っており、会計は1年ごとに上町・中町・下町を回ります。その年に会計が回ってきた町内では、一番長の世話人(長老)が会計長をつとめ、残りのものが会計と書記を分担します。世話人の仕事は、部分祭から翌年の道担神祭までですが、その中心は火祭となります。世話人は40歳の厄年前の男性で既婚者あり、安定的に住んでいるものの中から選ばれています。



大松明の結上げ



大松明結初式



祭典世話人

宵祭<鎮火祭>

現在では、祭りの本日は8月26日のようにみなされていますが、本来は宵祭ひょうまつりなのです。午前中、西念寺の住職が檀家総代を伴い諏訪神社へ行き、経をあげます。これを法楽ほつらといいますが、午後3時半には本殿祭を行い、浅間神社のミタマシロミタマシロ（御霊代）を神輿ことうりに移す御動座祭をおこないます。4時半には明神神輿あきみのかみり（お明さんという）に浅間神社と諏訪神社のミタマシロを移し、御影みかげ（富士山形の神輿・お山



御動座祭

さんという)に浅間神社のミタマシロを移します。諏訪神社の前の高天原には神輿が置かれ、5時になると富士信仰の信者や上吉田の若い衆に担がれて参道を国道へと下ります。神輿の神幸かみゆきは、まず新屋との境界の吉田橋まで行き、引き返して上吉田の御町から立宿へ曲がる交差点まで進んでそこで休みます。明神神輿は国道を行き来して、御影神輿は松山との境界まで行って戻ってきます。その後、西念寺住職が御影の通りでお迎えし、経を唱える



法楽へ向かう西念寺関係者(事務局撮影)

ので、神輿を住職の方へ傾けて挨拶をして通り過ぎます。5時半には榊町交差点にお迎えが来て2基の神輿が下りはじめます。明神さんが先に立ち、御山さんは後に従っていき、6時半頃に上吉田コミュニティセンターの御旅所に入ります。御旅所入口の両脇には、世話人が富士山の裾野から切り出した樅の木を立てて注連縄を張り、それを明神神輿の鳳凰ほうおうの嘴で切って入ります。

神輿が御旅所に納まるため太鼓が打たれ、御旅所祭が始行され、神輿の担ぎ手が大松明を立ち上げていきます。御旅所の大松明に世話人が最初に点火し、その後、世話人がそのほかの松明に次々に点火していきます。結松明は、関係者が富士信仰の関係者や企業から献燈してもらいますが、沿道



明神さんの発声



神輿の神幸



大松明の点火



燃えさかる大松明

の各家々で各々松明を立てています。松明に火が燈ると上吉田の通りを中心に町全体が火の海となります。それに呼び応じて、富士山の五合目から上の小屋でも、小屋の前に薪を積んで松明を燈し、町とお山が一体となって夏山仕舞の夜空を焦がします。御旅所では富士太々神楽が奉納されます。神楽囃子は伝説のもので、そこで十二舞が舞われます。

松明は夜半の11時頃まで燃やされていますが、以前は夜通し燃やしたといひ、大正時代に山梨県史を編さんするために調査された「若尾資料」(山梨県立図書館蔵)の「御祭礼及録日」には「18時より翌朝にかけて燃やし続けたことが記されています。戦争中の数年間を除いて、台風であつても必ず火を燃やし続けてきました。この祭で火事になったことはないといわれています。



諏訪神社が上吉田の氏神であることから、火祭は上吉田の氏子の祭りであると同時に、富士信仰に集う人々の祭りでもあります。富士講中は年間に4回ほど当地に来るものだといわれ、2月の部分祭、お山開き、お山入り、お山仕舞であり、火祭には多くの講中がやってきます。道者は諏訪郡系にある御師の家に宿泊し、その松明を囲んでオツタエ(お伝え)を唱えるなどの講行事を行います。また、松明の燃え残りの燐は火伏せの御守りとしてのご利益があるとされ、それを持ち帰る光景もみられます。



お山
燐拾い



宮元講のお伝え(事務局撮影)

本日<神幸祭>

8月27日が祭礼の本日です。午後1時に立出祭を行い、神輿は御師所を出て、金鳥居の交差点まで下ります。その後、一休みして下吉田との境界まで行き、3時には金鳥居まで戻り金鳥居祭を行います。神事には明神神輿と御影の両方に同じ供物が納められますが、御影は御師団の護持となっているので、神輿に替わって御師が神事を執り行います。現在では明神神輿は上吉田の各町内を裏通りも練り歩きます。再び立宿を登り、御旅所前で休憩をとります。上宿の西念寺大門の入口で西念寺の住職が経を唱え神輿のオクリ(送り)をします。近年は柳町バスを大塚付近まで行き、上宿交差点に戻ってくるようになっていきます。6時には柳町の通りを東進して下向道を上り、御師神社(馬蹄形の自然石)まで一気に上りあげ、明神神輿をその上に据え、

多岐石祭(たきいしまつり)の神輿が納められ、世話人は会計長だけが参列します。7時前にほかの世話人が幹事から提灯を持ってお迎えになるので、神輿が先導し、上宿で御神歌と呼ばれる祝詞を上げます。



金鳥居祭



御山さんの下向

ごしんが
御神歌

諏訪の宮 御影やいよう神 さいそう神
げにもそうろう やいよう神もそうろう

『吉田の火祭』

鼻音で唱え終わると、御神杖石の神輿に太鼓で合図します。世話人の代表（会計長）が提灯を高く掲げて神輿の先導をし、とっぴりと日の暮れた夜道の両側に世話人が提灯を掲げて道を照らしているその中を神輿が進みます。神輿が高天原へ戻ると、高天原で勢いよく神輿を廻します。仮に子供神輿が7周廻ると、明神さんは岡、御山さんはお周廻ようになります。「ヨイ

ヨイ、ヨイヨイ」の掛声とともに、ススキの御幣を手にした氏子と一体になって廻る様は社囃です。御山さんは立て続けに3回地面に叩き落とされます。神輿が神社に還幸すると、納め太鼓が打たれ、その後には諏訪神社のミタマシロを戻す諏訪神社還幸祭、浅間神社のミタマシロを戻す本殿還幸祭の高天原祭が行われます。

明台の中期真までは、中曾根にはま



神杖石祭



上松神事

た家がなく、神輿は金鳥居までの巡回でした。今日では、御影・御山さんは重いので表通りのみの渡御ですが、明神神輿は下町から上町まで上ってくるまでの間に担ぎ手の勢いにまかせて町内の横道・裏道を練り歩くこともあります。これは町内の氏子が主力となって、町ごとに継ぎ送りで担がれます。御山さんは大勢の担ぎ

手が担ぎ、上吉田だけではなく富士講の関係者などが他県からも参集して担がれます。神輿の休憩には、明神さんにはミタマシロが移されているので白の上に乗せて休み、御影は4つの櫓のうしろに揺えられます。



高天原を廻る神輿

祭礼後

神輿が納まると、他所の鞆威や旅行などに行っていたブクの者が帰ってきます。昭和の初期真までは、テマに出るものはテマギ(手間着)という単の浴衣を着て出かけたと伝えられます。手間見舞にはテマッココ(手間粉)という小麦粉を届けました。テマに出た者の近所は、祭りが終わってから

村境まで迎えに出ました。「お日長でございました」と挨拶し、家まで連れ帰ったといひます。25日の前夜祭と28日の後日祭は神職のみで行い、世話人は祭りの後片付けをして、火祭の神札を配ります。

以上が近年の火祭の実態です。

<堀内真>

<桑谷 学(記録写真撮影:『吉田の火祭』調査委員)>



火祭の終り

四百年前のお神幸

毎年8月26・27の両日、上吉田の町をおける「吉田の火祭」は、草やかに燃え上がるタイマツの炎と翌日の神幸（御幸）祭に象徴されるように、夏の終わりを告げるにふさわしい趣のある祭礼である。

この祭りは、いったいいつ頃から行われていたのであろうか。

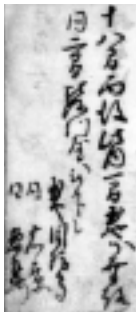
今のところ、祭礼の執行を伝える最

も古い史料は、元龜3年（1572）に吉田の町が現在の場所に移った際に作成された「吉田之新宿帳」（玉屋佐藤家文書ほか）である。この宿帳は、現在の上吉田の上宿・中宿の原型を記録する大変重要な史料として広く知られている。一見祭礼とは無関係のように見えるこの帳面に、次のように記された部分がある（別紙読み下し）玉屋

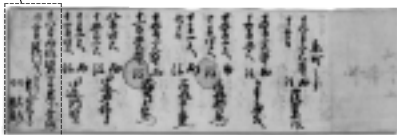
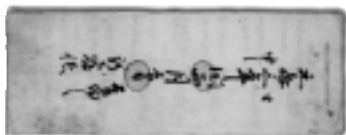
（佐藤家）三家の住む一角には、祭礼のときに神輿が通る御幸道が通っている、これが町立ての際承認されたというのである。このことは、現在の「火祭」でも行われている神輿の渡節が、この頃すでに行われていたことを示している。今は上吉田コミュニティセンターへ向うお神幸は、古くは諏訪神社の神主家（江戸時代中期以降は「神家」と

表記されることが多い）玉屋（佐藤家、中宿兼町）へのものであったらしい。こうした、祭礼の様子をより明確に示す古い史料が、玉屋佐藤家に残されていた（現在では西村町の畑田さんのお宅で大切に保管されている）（別紙読み下し）
難解な箇所が少なくないが、おおよそ次のように理解できよう。

十八間
面後
同 間
比（毘）沙門屋へ被下候
玉や周防守
同 右 京
同 惣左衛門



拡大部分



「吉田之新宿帳」

（鶴屋將監に預けた神領を玉屋に返すへき）御目交
御目交
恐れながら申し上げ候、前代より御淺間・同諏訪大明神
両社御神領のこと、昔より玉屋存知の二と紛れござら
候。それ故に玉屋屋敷へ南社毎年七月十一日、御高
土の山を飾り、御幸なされ候。一夜御腰を掛られ候
次いで二十日に一山の御慶御供にて、もとの御社へ御
神幸なされ候。しからは、作内殿御代下、少し親類内より
御神領に付き、何かと申し分ござれつれども、作内
殿へ色々御ことわり申し上げ候へば、聞き召しわかれ、
我ら方へ御神領御せ付けられ、御聞かせされ候。御礼
金として香高指し上げ申し候。香高の金額法成し難きに
付きて、鶴屋將監、前々より別して、香高とさなまに付き、
金三分無心申し、取り申し申され候故に、鶴屋へ右の御
神領少しの間御別き候て給え候えと相預け申すに付き
て二年相別かれ申し候。早七年以上よりこの方へ相相き
候わんと申し入れ候へば、何かとむさくさ申され相渡さ
れず候。昔より玉屋御神領存知のこと、吉田中にもあ
るの存じ申すこと候。この旨聞ことし召しわかれ、有
り様に仰せ付けらる様に御披露仰すこと候。



昔から、浅間・諏訪両社の御神領を玉屋(佐藤家)が差配してきたことは、紛れもない事実である。このため毎年両社の祭礼の際は、(神領を差配する)玉屋へ「みゆき(御幸)」が行われるのである。すなわち、毎年7月21日(明治6年(1873)の太陽暦採用以前はこの日取りで祭礼が行われた)には、富士のお山を模した飾り付けをした神輿のお神幸が(玉屋に)あり、そこに一夜神輿は腰掛けられる(安置される)次いで翌22日には、吉田中の御師衆が神輿のお供

をして神社に遷御するのである。ところが、「作内殿御代」に親類から何かと神領に対し異議が申し立てられ、どうか様々ご説明申し上げて(神領は事なきを得ることができた。この時そのお礼金として(作内殿に)金一両を指し上げたが、玉屋ではその一両を用意することができず、前々から悪態であった鶴屋将監に金三分(一両は四分)用意してもらい、その代償として鶴屋にしばらく神領を預けて差配してもらうこととした。しかし、2年以上経ってこちらが



御山神輿

神領を差配すると言っても何かと「むさくさ(いかに)も嫌そうに文句を言っている様子が目に浮かぶ表現である)文句を言って返そうとしない。神領が玉屋のものであるということ、吉田中の誰も知っていることである。どうかこの旨をご理解いただき、(鶴屋将監に対し支配者の権威をもって)あるべき姿に戻すように命じて頂きたい。

残念ながらこの史料には年次が記されていないが、これを推定するヒ

ントはある。史料中の「作内殿」というのは天正19年(1591)から文禄二年(1593)まで郡内を支配した加藤作内光吉のことである。神領に対するもめごとがおこったのが、仮に光吉の支配期間では一番新しい文禄2年のこととしても、この文書はそれから数年を経たずして作成されたと思われる。文禄の末から慶長の始め(1590年代後半)頃のものということになるだろうか。この時、7月21日・22日の祭礼の際に、富士山型の神輿

の玉屋への遷御があったことが記録されているのである。

文化年間(1804~18)に成立した『甲斐国志』の上吉田村諏訪神社の祭には、上吉田の下手の新倉村から、富士山型の神輿に(雪の代わりに)綿帽子をかぶせたものが、少年たちに担がれて上吉田の祭礼に参加したことが記録されている。先に見た史料にある「富士のお山を模した飾り付け」という表現は、まさにこれを指すのであろう。

「はや7年」とはどのようなことを指しているのかなど、この史料にはまだまだわからない難解な点も多いけれども、この一枚の文書によって、400年以上も前から吉田の火祭で地域の人々が富士山型の神輿を担ぎ続けてきたことがわかるのである。

総合調査の課程で「火祭」の歴史も明らかとなるであろう。

<菊池邦彦「吉田の火祭」調査委員 >



「諏訪大明神富士浅間宮火防御祭礼之図」/江戸時代



活動報告

博物館 歴史散歩 大宮・村山を歩く

平成15年9月28日(日)実施

富士山には、北口(吉田口)のみならず、幾つもの古い歴史を有する登山口があります。富士山の登山口を思い浮かべたときに地元である北口(吉田口)ばかりに目を向けがちになっていきますが、富士山を広い視点でとらえ、いろいろな富士山の歴史を知ってもらうことを目的に富士山表口(大宮・村山口)を訪ねる歴史散歩を開催しました。

講師:伊藤 昌光
(富士宮市教育委員会)



石造物入門講座

第1回 平成15年10月5日、第2回 10月19日 各日曜日実施

市内において古くから信仰心のあらわれとして奉納された石造物に彫られた像や文字の意味を解説し、地域の歴史を学んでいくことを目的に開催しました。今回は、全4回の日程で大明見地区を対象にして、どのような石仏や碑が町中のどこにあるのか調べました。その一部については、参加者の方々の熱意と努力のおかげで調査データとしてまとめることができました。

講師:畑大介
(帝京大学山梨文化財研究所)



平成15年度博物館実習

8月5日(火)~17日(日)の約2週間、5名の博物館実習生が学芸員資格習得のために学んでいきました。

都留文科大学、駒澤大学、大東文化大学、国士館大学、大正大学 各1名(男1、女4)

博物館実習カリキュラム

| 日 | 項目 | 内容 |
|------|--------------------|------------------|
| 1日目 | オリエンテーション・館内外見学 | 諸注意等 |
| | 博物館概要説明 | 施設運営・財務 |
| 2日目 | 博物館資料の扱い方 | 受入・収蔵・資料調査方法 |
| 3日目 | 博物館講座(体験学習)について | 教育普及事業・準備・試作品の製作 |
| 4日目 | 博物館企画展について | 事業説明・展示準備 |
| 5日目 | 考古資料の扱い方 | 考古資料の取扱い・拓本・実測等 |
| 6日目 | 博物館講座(縄文土器・土鈴作り教室) | 事業実施作業補助等 |
| 7日目 | 民俗資料の扱い方 | 民具等の取扱い・実測・写真撮影等 |
| 8日目 | 博物館資料の扱い方 | 収蔵資料の整理 |
| 9日目 | 施設見学 | 近隣博物館施設の見学 |
| 10日目 | 展示計画 | 展示シナリオの作成 |
| 11日目 | 展示計画 | 展示シナリオの作成 |
| 12日目 | 展示計画 | 展示シナリオの発表 |



休館のお知らせ

『年末年始・燻蒸休館』

平成15年12月27日(土)~平成16年1月13日(火)

年末年始に引き続き、館内燻蒸作業のため閉館となります。

1月5日(月)~9日(金)の期間、博物館及び歴史文化課の事務は、教育委員会に取り扱います。
〒403-8601 富士吉田市下吉田1904 教育委員会建物3F TEL 0555-22-1111(代)

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJUYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30~午後5:00 (午後4:30迄入館可)

休館日 / 年末・年始(12月28日~翌1月3日)

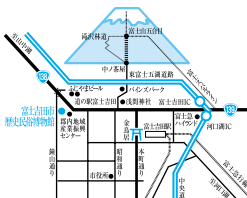
観覧料 / 大人 300円(団体 240円) 団体割引は20名以上に適用

小中高生 150円(団体 120円)

交通案内 / 中央自動車道河口湖ICより車で10分

富士急行線富士吉田駅より山中湖方面

バス15分、サンパークふじ下車



MARUBI 編集後記

今号「富士山あれこれ」のテーマは表富士をとりあげてみました。表があるから裏があるので、表富士が両口である以上、北口は裏富士となります。裏口という聞こえが悪いのであまり使いたくはないというのが本音で、負け惜しみのようなのですが、江戸時代の吉田の御師は陰陽五行説から、北(陰)から南(陽)に万物の流れがあると解釈し、北口を本道と考え、北表口とも称していました。...やっぱり負け惜しみのように聞こえます。しかしどちらからみても富士山は素晴らしい山です...(R)